

## 研究戦略骨子(案)に対する委員からの追加意見

### 【 研究戦略骨子(案)全体へのご意見 】

- 骨子の中で、具体的な研究の導入先のターゲット農家群が不明確な部分がある。研究後の推進を考えると、ターゲットごとに技術を組み立てることが重要であるため、応募に際して、研究ターゲットや波及可能条件を明確にするような仕組み（条件の明記など）を入れるべき。
- 農家の所得向上や収益向上を図る上では、市場分析や予測をもとに、消費者が買いたくなる高収益な農畜産物を研究（製品化）することが重要。今後は今以上に先進農業国との競合が考えられ、「安全」とは科学的根拠によってのみ保証されることから、それらの国々と同等もしくはそれ以上の安全を担保できる研究も必要。

### 【 研究戦略骨子(案)の本文へのご意見 】

#### 1. 農業を魅力ある産業にするための「収益力向上技術」

##### ■ 多収への挑戦

- 新たな経営モデルを示すことが前提として必要。
- 高品質の扱いは二つ目の「強みのある農産物づくりへの挑戦」に位置づけるべき
- 多収が必ずしも収益力向上に結びつくとは言えず、消費者からみて付加価値の高い農産物は高額商品でも購入されており、わが国の農地の現状から考えると「多収」にこだわる必要はない。多収ではあるが付加価値の低い農産物は質の向上（例えば栄養成分比が従来品の 50 %アップ）等の研究分野も重要。

##### ■ 強みのある農産物づくりへの挑戦

- 機能性食品の課題は、民間の責任において行うもので、政策として国が行うのは相応しくない。
- 研究の成果を現場に落とし込むための仕組みづくりや、商品素材を主体としたブランド化の研究が必要。
- 農業の6次産業化を確固たるものにし、海外農産物との差別化には生産者から消費者に渡るまでのフードチェーンの確立への挑戦が必要。

##### ■ 資材高騰対応への挑戦

- 化石燃料依存も資材高騰の要因であり、これも課題になる。
- 輸入飼料と同等以上の飼料の確保が質の良い畜産経営を実現する。

## 2. 新しい農家スタイルを提案する「生産流通システム革新技術」

### ■ 省力・大規模化への挑戦

- 新しい農家スタイルは、新しい農業スタイルに変更すべき
- 「■ 取り組みやすい農業への挑戦」も省力をねらった課題であり、統合すべき。
- 省力は中山間地域にも通じる課題であり、省力・大規模化という括り方は適切ではない。

### ■ 取り組みやすい農業への挑戦

- 障害者のための課題は研究要素としては小さい。
- 高精度生産予測技術の開発については、1戸が大規模経営であることに固執する必要がなく、個別農家群による大産地にも非常に必要な技術である。

### ■ 高パフォーマンス畜産への挑戦

- 畜舎等の洗浄ロボットや家畜出荷時の畜舎からトラック積み込みまでの機械化等による省力化、大型化に伴う環境負荷低減のための研究が必要。

## 3. 異常気象に負けない産地、強みのある農村をつくる「産地強靱化技術」

### ■ 異常気象対応・温暖化適応への挑戦

- 異常気象対応に関して以下のような課題が重要。
  - ・ 異常洪水による被害予測・対策技術
  - ・ 豪雨に対応できるほ場排水、貯留機能の強化
  - ・ 渇水による農業生産への影響予測技術
  - ・ 閉鎖系水域の水質予測技術
- 温暖化への適応技術に関して以下のような課題が重要。
  - ・ 高温障害対策技術
  - ・ 炭素貯留評価技術
- 「温暖化を利する農業の実現」という研究項目は、あまりにも範囲が広すぎて、何を期待しているのかイメージもわきにくいいため、ほかの研究項目と同程度にターゲットを絞るべき。

### ■ 強みのある農村づくりへの挑戦

- 地域政策として、多収・大規模経営ではない中山間地域の農業について多面的機能を果たしている地域固有の地域資源を評価し、整備・保全する課題は重要。
- 生物多様性、地域振興、基盤整備、鳥獣害対策、人口減少、拠点集落計画等中山間地域の課題を地域経営、国土経営という視点から取り組む必要がある。
- 「新たなサービス供給システム」がどのようなものかがイメージしにくい。
- 「中山間地域における6次産業化手法の開発」、「中山間地域における収益力を向上させる地域産業育成と地域経営モデルの開発」の2点については、開発した技術を他地域に活用できるような一般化手法の開発、成立条件の明確化が実現するような研究が必要。